

農林害虫防除研究会 Agricultural Insect Pest Management Society of Japan

News Letter No.30

Newsletter of The Agricultural Insect Pest Management Society of Japan No.30

2013年1月15日

研究会所在地：独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構

果樹研究所カンキツ研究口之津拠点

〒859-2501 長崎県南島原市口之津町乙954

ホームページ： <http://agroipm.ac.affrc.go.jp/narc.html>

巻頭言

基礎研究と応用研究の連携

柴尾 学

(大阪府立環境農林水産総合研究所)

暗いニュースが続く今日この頃、久しぶりに日本が元気になる明るいニュースが入ってきました。2012年10月8日に発表された京都大学山中伸弥教授のノーベル医学・生理学賞の受賞です。このニュースは新聞、テレビ、雑誌などで大きく取り上げられ、山中先生の記者会見の様子や一問一答などが掲載・放映されました。山中先生の受賞に心からお慶び申し上げます。

さて、山中先生の受賞には野田佳彦首相をはじめ多くの方から喜びのコメントが寄せられました。これらの中には農林害虫防除の研究分野にもたいへん参考になるコメントがありました。以下に、同じくノーベル賞を受賞された利根川進先生のコメントの一部をご紹介します。「山中伸弥先生のノーベル医学・生理学賞のご受賞、大変嬉しく思っております。(・・・中略・・・)先生のご受賞のニュースに接し、2つの思いが胸に去来しました。(・・・中略・・・)2つ目は、山中先生のiPS細胞のご研究は、医学・薬学などの応用分野に多大な可能性を提供しておりますが、もともと、先生の基礎研究における傑出した独創的な発見から始まっています。社会に役立つ技術の開発には、基礎研究がいかに大切かということを証明していただいたという点からも、大変嬉しく思っております。(・・・後略・・・)」

私のような都道府県の研究機関に所属する研究者は現場で問題となる農林害虫を効果的に防除するため、新しい殺虫剤、新しい生物農薬、新しいフェロモン剤などの実用性を評価し、これらの防除資材を現場に普及するべく日々研究を進めています。主に応用研究に携わっていると言えるでしょう。これらの防除資材ですが、よく考えると、もともとは基礎研究における傑出した独創的な発見から開発が始まっています。利根川先生のコメントにありますように、諸先輩方によ

る基礎研究の成果があったからこそ社会に役立つ技術、つまり農林害虫を防除できる有効な手段を私たちは持つことができたのです。こう思うと、私たちの研究分野においても基礎研究がいかに大切かということがわかります。

一方、これに関連して、山中先生はある雑誌のインタビューで次のようなお話をされています。「(・・・前略・・・)今後の日本には両サイドの人材が求められると感じています。1つのことをずっと長く行うことも非常に大切です。石の上にも3年、3年どころか10年、20年と頑張るのも非常に大切で、それでしか成し得ない仕事もたくさんあります。しかし、それだけではなくて、やはりどんどん変化していく柔軟性を持つ研究者や人材がもっと認められてもよいのではないかと思います。(・・・中略・・・)今後、日本でも両方の人材が育ち、どんどん新しいことにチャレンジしていく人にも支援の手を回してほしいと思います。反面、少々成果が出なくても、かじりついてじっくり研究を行う人にも支援がいくように、両方のバランスをとることが求められていると思います。」

山中先生のお話は、基礎研究を行う研究者と応用研究を行う研究者とを単純に比較されたお話ではありませんが、示唆に富んだお話だと思いました。農林害虫防除の研究分野でも、これからますます基礎研究と応用研究の両面で人材が育ち、両方のバランスをとることが求められているように思います。農林害虫防除研究会は研究者、普及指導員、行政担当者、農薬メーカー等の防除資材関係者など幅広い分野の人たちで構成されています。さらに、研究者におかれましては、基礎研究から応用研究まで幅広い研究テーマに携わる皆さんが入会されています。今後、応用研究を担当されている研究者の皆さんは、基礎研究を担当されている研究者が開発した成果を現場で実証し、新しい技術の開発をサポートすべきだと思います。また、基礎研究を担当されている研究者の皆さんは、応用研究を担当されている研究者が日頃感じている現場ニーズを把握し、新しいシーズの開発を進めるべきだと思います。本研究会が基礎研究と応用研究の連携の場、人材育成の場、そして研究のバランスをとる場として、十分に活用されることを期待します。

ところで、講演会などでの山中先生の名言は、ネット上で「山中語録」としてまとめられているのを目にします。そのひとつに、「野球は3割打つと大打者。でも研究は1割バッターで大成功だと思う。1回の成功は9回失敗しないとやってこない。」という名言がありました。ということは、私の場合は犠牲バントくらいしかできていないのか・・・とったりします(いやバントすらできていないという話もある)。なかでも、個人的に最も気に入っている名言は、「講演では最低1回、会場の笑いを取るように心がけている。」です。皆さんも大会の講演では、最低1回、会場の笑いを取るように心がけてくだされば、大会がさらに盛り上がるように思います。

(2012年11月30日受領)

ニュース

レッドデータブック改訂に際して思うこと

窪田聖一
(愛媛県農林水産研究所)

愛媛県では、2003年に愛媛県レッドデータブックが刊行された。私も昆虫分科会に参画させていただいており、現在その改訂作業を行っているところである。愛媛県レッドデータブックによると、既に愛媛県から絶滅したと考えられる種類は29種とされており、哺乳類ではニホンオオカミが唯一絶滅種とされている。また、昆虫類では7種が絶滅とされており、この中には世界で最初に愛媛県の皿ヶ嶺で発見され、新種として記載されたベニモンカラスシジミも含まれている。野生の動植物を取り巻く環境は悪化が続いており、今後も大半の種類で減少傾向が続くのは避けられないと思われる。

ところで、最近、環境省からショッキングな報道が行われた。ニホンカワウソは従来絶滅危惧種とされてきたが、1979年の目撃例以後確かな生息確認の情報がないこと等から、絶滅種に指定された。本種は愛媛県の県獣に指定されており、地元の動物園でもシンボルマークとされているなど、愛媛県民としては身近な動物という印象が強いだけに、心境としては複雑なものがある。

確かに生息環境は悪化しており、カワウソの生存の望みは極めて低くなっていると考えられる。しかし、県内には、本種の再発見を夢見て現在も生息状況調査を行っている方もおられる。いちの望みにかけて再発見を目指している方からすれば、今回の環境省の発表は信じたくないものである。数年先には愛媛県レッドデータブックの改訂版も発刊されるが、そこではカワウソはどのランクになっているのであろうか。(2012年11月15日受領)

4%の根拠

小池 隼
(群馬県農業技術センター)

不届き者な私は、米麦の発生予察の調査の主担当であるにもかかわらず、イネ縞葉枯病をムギの縞萎縮病と頻りに混同してしまうなど、防除所職員としてあるまじき状態でした。

そんな私を見兼ねてか、心優しい先輩が「群馬県のヒメトビウンカの要防除水準が4%になっている根拠を教えてほしい」と、宿題を与えてくださったのでした。

確かに、ヒメトビウンカの要防除水準を定めている県は群馬県の他にもありますが、調査時期も目安となる保毒虫率もバラバラな状況です。虫数を基準にしている県もあります。

言われてみると不思議ですね。言われずとも疑問を持つことが研究員の基本なのでしょうが、恒常的な思考停止症状に陥っていた私の脳内においては、4%が素通りしていたのです。

調べてみると、平成5年度より以前に発表された情報では「10%」が基準になっており、それ以降は「4%」になっていました。その間に何があったのか、当時を知る某係長に確認したところ、「凝集ラテックス法からエライザ法に検定方法が代わり、精度が向上したため4%に引き上げた」とのことでした。ああ、そんなことがあったのですね。

それではなぜ当時は「10%」だったのでしょうか。古い文献を調べるうちに、「イネ縞葉枯病の流行機構(岸本良一先生ら,1985)」という報告にたどり着きましたが、この中で、「1977~78年に関東中部各地で被害株率と保毒虫率を調査したところ、被害の限界となる保毒虫率は8~10%と考えられる」という旨の記述がありました。昭和62年度(1987)以降に県から発表された情報においては「10%台は危険」と記されており、時期的にほぼ一致するため、この報告が10%の根拠となっていると推測したのでした。なるほど、(おそらく)こんな経緯があったのですね。勉強になりました。

学生時代にお世話になった鳥山重光先生は著書「水稻を襲ったウイルス病」の中で、「保毒虫率と縞葉枯病発生程度との関係について、年次、地域性を超えてすべての事例に当てはまる説明を得ることは容易ではないように思われる」と記しています。確かに、岸本先生らの報告やその他の文献を見ても、保毒虫率による全国統一の要防除水準を設定するのは難しいことがうかがえました。保毒虫率が独り歩きしないよう、留意しておく必要がありますね。

現在、群馬県内の二毛作地帯ではイネ縞葉枯病抵抗性品種が作付の大半を占めており、近年北関東で高まりつつある保毒虫率も他に比べればかなり低い状況です。しかし、主流の防除体系の変化、コシヒカリ等感受性品種の作付の増加など不安要素も少なくありませんので、注意していこうと思います。

(2012年12月4日受領)

ツルマメの昆虫相調査雑感

菊地淳志
(近畿中国四国農業研究センター)

昨年から2年間、ツルマメの昆虫相を調べることになった。ふだんの害虫防除のための研究とは違い、どちらかというとマニアックな仕事で久しぶりに虫採りを楽しんだので、その感想をいくつか書きたい。予算：農水省の委託プロジェクトではあったが仕事の性格上、採集用具や標本作成用具をたくさん購入した。昆虫針などは10年分以上でも事務方から文句は一つもない。ところが、事務用品はチェックが厳しく、ケント紙にはいちゃもんが。ラベルに必須と説得して10年分以上をゲット。虫の台紙貼付用に木工用ボンドを多めに頼んだら、何に使うのか、そんな

にたくさんいるので、こちらは断念。 虫の習性：ウコンノメイガ幼虫は特異な逃げ方をするとされる(Brackenbury, 1997)。この幼虫はダイズ害虫なのでよく目にするが、その行動をじっくり見たことはなかった。今回は飼育中にも観察できたし、野外で何匹か取り逃がした。なお、ヒメクロミスジノメイガやウスアトキハマキなどの幼虫も同様の行動をした。 採集習性：業務科の人と二人で調査した。大先生と比べるとおこがましいが、ぼくは1か所集中型の宮本正一先生タイプ(立川,2012)、彼は多地点探索型の長谷川仁先生タイプで、結果は。。 休眠：6月上旬にシロシタヨトウ幼虫を採集し中下旬に蛹化。ところが、暑すぎるのか羽化しない。半分を26 15L9Dの恒温室へ移動してみた。結局、内的休眠だったのか室温、26 ともに9月中旬に羽化。蛹の一部からは大型の寄生蜂も9月中旬に羽化し、シンクロの妙に感じ入った。 チャレンジ：ダイズギンモンハモグリの展翅に挑戦した。本レター14号の那須さんの展翅法が役に立った。役に立たない雑文に目を通してくれたあなたに感謝したい。 (2012年12月5日受領)

いちごの天敵を普及して感じたこと

中村吉秀
(長崎県農産園芸課)

長崎県は促成いちごが約300haあり、全国5位の生産面積です。天敵も普及しており、ハダニ類に対してチリカブリダニ、ミヤコカブリダニが約3割で導入されています。

最近、「天敵は初めて」の生産部会から、新たに導入したいという相談があり、講習会に参加させてもらい、使い方を指導しました。生まれて初めて天敵を見たということもあり、参加した皆さんは興味津々で、また、上手に使うと農薬を減らすことができ、人(自分)にも、いちごにもやさしい農業ができるということもあって高い期待を持ってもらい、今後の展開が楽しみとなりました。

ところで、新しい防除法を導入しようとした場合、その技術が簡易・安価であったり、その病害虫対策で非常に困っていたりすれば、速やかに入っていき、もしくは、現在より非常によく効いたり、農家に特別な思い入れがある場合もたやすいかと思えます(ただ、すべてに該当しなくとも、セールスポイントを使って、ウデのいい普及指導員が普及するときもあるかと思えます)。

今回の技術は、安定した効果もあり、生産者の関心も高いことから、成功事例や体験を多くの人で共有、積み重ねることで普及していくものと思っています。

あらためて、良い防除技術とはと考えると、被害をそこそこ(許される程度)に抑えて、簡単でコストも高くない技術や、その方向(方法)に改良した技術ではないかと思えます。それは、生産、防除技術を考える際に、「原点を(初心を)忘れてはならないな」と思ったところです。

(2012年12月14日受領)

チャ(茶)の侵入害虫のチャトゲコナジラミが ツバキやサザンカ等を中継基地として拡がった可能性

徐 錫元
(協友アグリ株式会社)

中国を原産地とするチャ(茶)の侵入害虫のチャトゲコナジラミは、平成16年に京都府の茶園において日本で最初に発見され、次第に周辺部の茶県に拡がり、平成24年には関東地方の群馬、茨城、神奈川、千葉、栃木や長野の各県においても新たに確認され、現在では茶の主要産地の静岡、鹿児島、三重、福岡、京都、奈良、埼玉等の府県を含む九州から関東地方に亘る広範囲な地域で見られている。成虫(第1図)は新芽を吸汁する。また、幼虫(第2図)は葉を吸汁し、排泄する甘露によりすす病が発生する。樹全体で見た場合、すそ部程、幼虫の寄生が多く、また、すす病の発生も多い。

チャトゲコナジラミは、チャの他に同じツバキ科のツバキ、サザンカ、サカキ、ヒサカキ、また、シキミ科のシキミ等にも寄生し葉を加害する。以前、著者はチャトゲコナジラミが多発した茶園に隣接する農家の屋敷周りの垣根、また、花木園のツバキ(第3図)やサザンカを観察したが、多くにチャトゲコナジラミの寄生が見られ、甚発生のものにはすす病も見られた(第4図)。ツバキやサザンカは全国的に農家の垣根、庭、水田・畑地周辺、街路地などにも植えられていることが多い。水田は全国に連続的に繋がり広がっているが、茶産地は飛び石のように散らばっている。こういう意味において、チャトゲコナジラミの全国的な拡がりには、チャトゲコナジラミの茶園から茶園への移動(チャトゲコナジラミ寄生苗木の移動を含む)の他に、ツバキ、サザンカ、サカキ、ヒサカキ、シキミ等が中継基地となって拡がった可能性がある(証拠は無い)。

病害虫の防除は作物が栽培されている圃場において行われ、圃場外の屋敷周辺部や非農耕地において行われることは少ない。茶栽培農家の場合、事前に情報があれば、チャトゲコナジラミの防除のために茶園への防除と同時に屋敷周辺、庭などのツバキやサザンカ等への薬剤防除は可能である。しかし、それ以外のチャトゲコナジラミの認識が薄い非茶栽培農家や非農家の敷地内外、さらには公園や農道脇など公的な場所でのツバキやサザンカ等への実際の対処の仕方については、今後の課題と思われる。

チャトゲコナジラミは、発生当初、その生態や防除方法が不明であったことから、各県とも大いに警戒した。しかし、今日では、その生態が明らかになってきたことや、茶の主要害虫のカンザワハダニ、チャノホソガ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、ハマキ類などの防除剤で、同時にチャトゲコナジラミにも高い防除価を示す剤が多数登録されてきたことから、チャトゲコナジラミは、薬剤を適切に選択さえすれば、通常の防除体系の中で防除が可能で、難防除害虫にはならないと思われる。なお、三重県の茶産地の指導員の話によると、最近では、

チャトゲコナジラミの発生増加に伴い天敵のシルベストリコバチの密度も増加しているとのことで、この防除をさらに容易にするものと思われる。 (2012年11月30日受領)



第1図 チャトゲコナジラミの成虫
(三重県大台町 2011年5月中旬)



第2図 チャトゲコナジラミの幼虫
(三重県大台町 2011年3月下旬)



第3図 チャトゲコナジラミによるすす病が見られたツバキ
(三重県鈴鹿市 2011年4月上旬)
注)茶園から300m程離れた花木園において



第4図 すず病が見られたツバキのすそ部と葉裏に寄生する
チャトゲコナジラミの幼虫
注)第3図のツバキ被害部(三重県鈴鹿市 2011年4月上旬)

最近和歌山県のカンキツ産地で問題になっているオナジマイマイ

貴志 学
(和歌山県果樹試験場)

ここ数年(と言っても私が虫害担当になって2年目ですが),マイマイ(カタツムリ)の防除についての問い合わせが急増し,今年度11月末までの害虫防除の問い合わせ件数の約1割を占めました。調査により本県のカンキツ園地で大発生しているのは,従来のウスカワマイマイではなく,オナジマイマイ *Bradybaena similaris* (Férussac) (図)であることが明らかになりました。また電話対応の情報から推測する発生が多い地域は和歌山県中央部の有田川町から湯浅町にかけてのカンキツ園地であり,一部は県北部の和歌山市内からの問い合わせもありました。そこで地元JAありだの指導員さんの案内でマイマイについて問い合わせのあった有田川町から有田市のカンキツ園地20数園地を調査したところ,9割以上がオナジマイマイの問題であったことが分かりました。防除法についての試験はまだ始めたばかりですが,従来の株元への銅板の巻き付けやメタルデヒド粒剤・燐酸第二鉄水和物粒剤の撒布により一定の効果が見込めそうです。

江戸時代にはすでに日本に侵入していたオナジマイマイですが,近年カンキツ園地で急増した理由は不明です。生態についても不明な点が多く,効率的な防除法を考える上でも継続的な調査を行いたいと考えています。(2012年12月4日受領)



微小害虫飼育の味方

萩原駿介

(福井県農業試験場)

農業試験場に配属され、4年が経ちました。配属当初引き継いだ仕事はミカンキイロアザミウマに関する課題でした。現在はタバココナジラミを相手に悪戦苦闘しているところです。研究を進めるにあたっては、これら微小害虫を累代飼育するわけですが、吸虫管を持ちつつ、チューブを咥え、目を凝らしながら頭の中で頭数を数えるのにはなかなか慣れませんでした。ある時、上司の高岡から「医療用の吸引器が意外に使えるんじゃないか」との提案があり、早速購入し、試用してみました。



写真1 低圧持続吸引器本体

この携帯型の低圧持続吸引器は外出先での唾液の吸引に主に使用されるもので、電源は単一乾電池2本です。毎分535mlの吸引力は強力とは言えませんが、アザミウマ類やコナジラミ類を扱うには強すぎず弱すぎず十分です。扱う個体数が数頭～数十頭程度の場合には、チューブの先をテトロンゴースで覆い、そこに1000 μ lのチップをはめ込んで使用しています。また、吸虫管のガラス瓶に相当する部分にペットボトルを使用することができるため、野外などでの大量採集の際に採集後いちいち別の容器に移し替える必要がありません。地点ごとにペットボトルを交換し、テトロンゴースで覆ってゴム留めしておけば簡易に持ち帰ることが可能です。そして何より電動ポンプなので口の吸引疲れが無いことが一番助かります。しばらく使ってみての使用感は以上のようなところです。日常の中にも試験研究に取り入れられるヒントが転がっていると学んだ出来事でした。

(2012年12月7日受領)

予察業務と花粉症

春山直人

(栃木県農業環境指導センター防除課)

栃木県は日光杉並木でも有名なほどスギが多い。筆者は発生予察に携わっているが、今や、国民の4分の1とも3分の1とも言われるひどいスギ花粉症であり、春の調査は気が滅入ってしまう。これだけならば、ごく一般的な悩みである。しかし、県職員として働き始めてかれこれ、労

務災害ではなかろうかという新たな花粉症を発症してしまった。

おそらく全国の発生予察に携わる方の中には、イネ科花粉症をお持ちの方は多いだろう。私の所属する防除課においては、実に6名のうち3名がイネ科花粉症患者であり、斑点米カメムシ調査のための牧草地掬い取りや、出穂後の水田掬い取りは地獄である。各員ともマスクを二重にし、目を真っ赤にして必死で網を振り回す。最近では、フェロモントラップを用いた斑点米カメムシ類の予察法の研究が進んできたとのことで、労力面だけでなく健康面からも、こうした新技術の登場を心待ちにしている。

3つ目の花粉症は、イチゴ花粉症である。当防除課では、イチゴに発生するアザミウマ類について詳細な調査を行っているが、節約のためにビニールチューブにメッシュを取り付けただけの簡易吸虫管を多用したのが間違いであった。アザミウマと一緒に、メッシュの目を抜けてしまう花粉を直接吸いこみ続けた結果、のどと鼻をやられてしまったのである。イチゴ花粉症というと耳慣れない方も多いと思うが、実は、このアレルギーはイチゴ関係者には案外多い。特にイチゴ育種に携わる職員には多く見られるそうで、これもイチゴ王国たる栃木県ならでは、名誉の負傷(?)なのかもしれない。

さらに最近、4つ目を発症してしまったようだ。現在、アザミウマ類の採卵をするために、安いミツバチの餌用花粉を用いているのだが、油断したのがいけなかった。個別飼育用のアクリル管にひと匙ずつ分ける作業をしていると、静電気によってこれが飛び散るのである。気づいた時には鼻水が止まらず、以降は作業時にマスクが必須となってしまった。花粉症未経験の諸兄には、みだりに撒き散らしたり浴びたりしない、是非とも慎重な花粉の取り扱いをお薦めしたい。

(2012年12月6日受領)

転勤後の楽しみ

鈴木 誠

(神奈川県農業技術センターかながわ農業アカデミー)

「4月からは、かながわ農業アカデミー教務課長です。」「えっ、何で」「よくわからないが、そう書いてある」「どうして・・・」2012年3月27日、所長室内でのやりとりです。ということで、4月から新たな職場で働いております。これまでお世話になった方々への連絡もせずに、不義理を働いてしまいましたが、この文章で感謝を述べたいと思います。「ありがとうございました」「そのうち戻ります・・・(希望)」

「農業アカデミー」って何？ 他県で言えば、農業大学校のことです。

今年の4月から、私の対象が、ものも言わず従順？だった虫達から、18~60歳までの学生に変わってしまいました。神奈川県に採用されてから、ほとんどの時間を昆虫と病害虫を対象として

きただけに、戸惑いを感じています。

ご存じだと思いますが、農業アカデミー（農業大学校）は、農業後継者や新規就農者を育成する学校であり、本県では約90名の学生が実習に、座学に励んでいます。やんちゃな学生から定年退職後の学生まで、非常に多様な学生が学んでおり、日々戦いとなっています。

高校卒業して直ぐの学生には、法律を守れといいながら当方もタバコを吸いながら注意をし、男子寮に女子学生が居るとか、飲酒しているのではないかと学生寮指導員に指摘されるは、休日当番なのに連絡もなく欠席するとか、何かトラブルがある度に呼び出され、過呼吸で苦しんでいる学生のため救急車を呼んだり、牛に足を踏まれ骨折した、熱が出た、指を切った、熱中症とか、蜂にさされたとか、年配の学生からは「これだから公務員は」とのお決まりの文句を言われ、戦々恐々の日々を送っています。

せっかく学校に異動して来たものの、授業はほとんどさせてもらえず、悶々とした日々を送っていますが、ハンコ押しやメールでの急な仕事に追われる中、週に3~4回はふらっと、圃場巡りを楽しんでいます。まだまだ未熟な学生達が栽培している作物ですので、これまであまりお目にかかれない害虫たちの写真が撮れ、ライブラリーが増えたと密かに喜んでいます（これではいけないと思っていますが・・・）。例えば、コブシハバチが大発生、チャドクガで丸坊主にされたツバキ、マメコガネ成虫によるナスやモロヘイヤの葉の食害、サンゴジュハムシの食害によりほとんど葉が残っていないガマズミの仲間、ハコベハナバエによるハウレンソウの食害（海老名市では初確認）、ニワトリを吸血するダニの仲間ワクモ、などなどです。さらには、冷たい視線を受けながら、事務機の横で、採集したオオミズアオやアカボシゴマダラの飼育を楽しんだりもしました。

また、農業基礎及び園芸栽培演習という学科目に「病虫害診断実験」という授業があり、これだけはやらせてくれとお願いしました。授業の流れは、限目に診断を間違いやすい症状をスライドで示し、何故このような授業があるのかを考えてもらい、限目は圃場に出向き病虫害の発生調査や、サンプリングを行いました。驚いたことに、スイーピングをした学生の網の中に、マメハンミョウが入っていました。前の職場でも、問い合わせが数件あったのですが、最近増えているのでしょうか？一昔前は、ほとんど情報がなかったような記憶がありますが・・・。その後の
～ 限は採集した病虫害を図鑑等を見ながら診断・同定し、病虫害雑草防除指導指針を用いて対処方法を考えました。

診断・同定では、昆虫の「目」ぐらいでの判断を期待していたのですが、ご多分に漏れず八日目と八工目の違いがわからないは許容範囲で、中には微少なゴミや枯れ草を見ながら「これ何ですか？」には笑いました。

併せて顕微鏡による観察も行い、スケッチも課題としました。なかには、スケッチの上手な学生もあり感心したり、虫の足の数が分からない学生も多くがっかりしたり、と考えさせられる授業でした。久々に捕虫網を持った学生達は、いきいきと昆虫採集を楽しんでいるようで、絶滅危

慣種の昆虫少年を復活させたいと考えてしまいました。

病害虫の名前もわからず、さらには圃場の観察もせず、コースの先生に言われたままに薬散をしていた学生も多くいるようです。いままでお付き合いしてきた生産者の中にも、スケジュール散布や、周りが防除しているから私も、という方々が中にはおられました。そのような方々への指導はしばらくできそうもありませんが、ここにいる学生達が卒業するまでには、最低限の技術を身に付けさせようと考えています。

今日も、コースの先生の目を盗みながら、病害虫の撮影のため、若い学生達の笑顔を見るため、圃場の巡回を楽しもうと思います。 (2012年12月10日受領)

北日本で多発するオオタバコガ

木村勇司

(青森県産業技術センター農林総合研究所)

2010年猛暑の夏、岩木山ろくで栽培されているスイートコーン「嶽きみ」に虫害が多発し、猛暑で農薬が蒸発したと新聞で報道されました。防除所が現地調査をしたところ、オオタバコガによる食害だとわかり、慣行で散布された合ピレや有機りん剤が効かなかったことが農薬蒸発事件の真相でした。2011年には青森県西部にある屏風山のすいかがオオタバコガの被害にあいました。青森県の露地作物でオオタバコガの被害が多発したのはこれらがはじめてのことでした。

これまで、県内で調査されたフェロモントラップでは年間の総誘殺数が多くても100頭を超える程度でした。ところが、2010年には、おいらせ町(防除所定点)で492頭となり、2011、2012の黒石市(農林総研)では700~1000頭を超える発生がみられました。その発生パターンは9月の発生がもっとも多く、年によりその前世代(8月)が多かったり、後世代(10月)が多かったりするもの(図1)で、温度条件からみると北日本における典型的な発生パターンだと思われます。

オオタバコガは亜熱帯起源の昆虫ですが、短日・低温で休眠蛹となり、温帯の気候に適應できるとされています。関東以南では越冬が確認されていますが、青森県では露地越冬は“ほぼ”ないものと考えます。なぜなら、平年の気温でオオタバコガが蛹まで発育できるふ化時期の晩限は9月初めで、それらは低温・短日により休眠蛹となりますが、図1に示すようにその時期は成虫の出始めで、発生は少ないと考えられるからです。さらに、休眠蛹となったとしても越冬中の低温により死滅する可能性があり、2011~2012年の越冬蛹はすべて死亡しました。しかし、“ほぼ”とした理由は、2012年のように9月の気温が高い場合は9月中旬のふ化まで休眠蛹が発生することと、2011~2012年の冬が異常な寒さで休眠蛹の耐寒期間0~90日を超えていたことがあげら

れます。今秋，地下に埋設した休眠蛹が冬を乗り越えられるかどうかで露地越冬が可能かどうか結論を出せると思います。ちなみに，ハウスでは越冬することが確認されています。

(2012年12月7日受領)

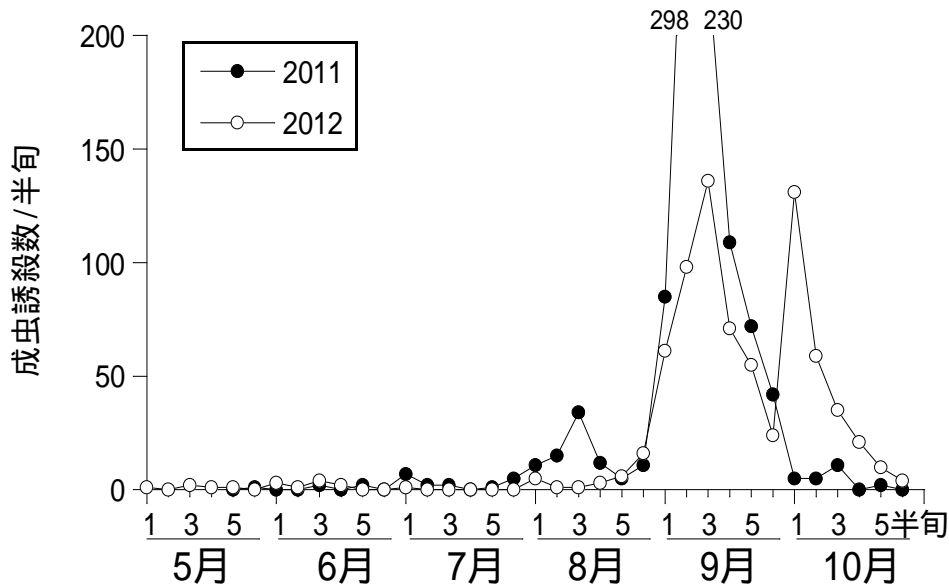


図1 フェロモントラップによるオオタバコガ成虫発生消長(黒石, トマトハウス周辺)

カメムシ類の脅威

新谷誠敏

(JA京都中央)

2012年は，カメムシ類が大発生した年でした。特に水稻における被害が多く，当JA管内では，過去に例の無い程，斑点米の混入があり，農産物検査による2，3等の格付理由でもカメムシ類によるものが75%（前年16%）を占めました。7月～8月にかけて降雨量が少なく日中の気温が高かった事などが，カメムシ類の繁殖に好適だったのが原因とが。

京都市右京区に在住している私も自宅にいろんな種類のカメムシが飛来した年でもありました。「チャバネアオカメムシ」「ホソヘリカメムシ」「ハラビロヘリカメムシ」「ツヤアオカメムシ」「ヒメホシカメムシ」など。「クサギカメムシ」は特に常連客ですが。

2010年に京都府で初確認された「ミナミアオカメムシ」も生息地域を徐々に拡大しております。2012年8月2日，夕方，突然の支店からの連絡でした。「たった今，ナス生産農家よりテントウムシみたいな虫の大群をもってこられたよ。」という連絡でした。「へ！それ，ミナミアオカメムシの幼虫とちがう？」直ぐに現場へ急行しました。残念な事に，「ミナミアオカメムシ」の幼虫とほ

ば個人的に断定。(写真1)捕獲した幼虫は確認のため、飼育ケースで成虫になるまで飼育することにしましたが、10数匹いた幼虫は、脱皮を繰り返しながら3週間程度まで生存しましたが、死んでしまいました。どうも餌が原因だろうとの事。

水稻以外では、2011年に京都市伏見区において枝豆に発生を確認しており、今年、ナス圃場で確認。ナスへの被害は特にありませんが、生息地域が拡大していることは間違えなさそうです。

また、水稻では、幼虫が集団で稲穂に発生している場面(写真2)や、水稻刈取後、近隣の野菜圃場などへ大量に飛来している場面(写真3)も確認できました。

2012年は、カメムシ類による被害がここまで多くなることは予測できませんでした。カメムシ類の脅威です。

今後、更なる防除対策を各関係機関の皆様方からのご協力をいただき、検討したいと考えます。ご指導よろしくお願ひ申し上げます。(2013年1月9日受領)



写真1
(2012.8.2 京都市伏見区)



写真2
(2012.9.4 京都市伏見区)



写真3
(2012.10.26 京都市伏見区)

第18回農林害虫防除研究会（奈良大会）のご案内

第18回農林害虫防除研究会（奈良大会）は、下記のとおり2013年7月11日～12日の期間中に開催することになりましたので、ご案内いたします。なお、詳細については、今後、農林害虫防除研究会HP（<http://agroipm.ac.affrc.go.jp/narc.html>）に掲載を予定しておりますので、そちらもご覧ください。

<大会の概要>

- (1) 日程：平成25年7月11日（木）～12日（金）
- (2) 会場：奈良ロイヤルホテル（シンポジウム・一般公演）
奈良市法華寺町254-1(近鉄新大宮駅徒歩10分) TEL:0742-34-1131（代表）
- (3) シンポジウム「奈良県での研究と普及の連携体制とその成果（仮題）」

<お問い合わせ>

奈良大会事務局

奈良県農業総合センター 環境・安全担当 病虫害防除チーム（担当 井村岳男）

〒634-0813 奈良県橿原市四条町88

TEL：0744-22-6201 FAX：0744-22-8068

Email：imura-takeo@office.pref.nara.lg.jp（担当 井村岳男）

第17回農林害虫防除研究会（新潟大会）報告

第17回の農林害虫防除研究会は2012年6月14日(木)～15日(金)に新潟県長岡市のホテルニューオータニ長岡で開催されました。参加者は独立行政法人，都道府県，農薬会社，農業団体の関係者160名でした。大会は、午後1時から開会し、本会上野会長挨拶のあと並木新潟県農業総合研究所長から歓迎の挨拶がありました。

続いて行われたシンポジウムは、テーマを「カメムシ対策のこれから ～カメムシ類の加害種変動とつきあい方～」とし、4名の方から講演をいただきました。このテーマはコメどころ新潟らしい斑点米対策を軸として採用されたものです。座長は(独)九州沖縄農研の樋口博也博士にお願いしました。新潟県防除所の永瀬淳氏から「新潟県における斑点米カメムシ類主要種の変遷と防除対策」、宮城県古川農試の加進丈二氏から「アカスジカスミカメによる斑点米被害と水田雑草管理」、(独)中央農研北陸研究センターの高橋明彦氏から「アカヒゲホソミドリカスミカメ合成性フェロモ

ントラップの利用技術」,三重県農業研の鈴木賢氏から「ミナミアオカメムシの三重県での発生拡大要因を考える」の4題が講演され,いずれも最新の試験や調査結果を織り交ぜながら,新顔カメムシの生態と対応策を示していただき,多くの参加者に興味深い内容でした。

その後,2日目の15時20分まで25題の一般講演がありました。

この中で1日目の最後3題は,「大会地元枠」として会員外で新潟県内の害虫関係の活動の成果を発表してもらおう場とさせていただきます。新潟県森林研の布川耕一氏からナラ枯れの被害動態と防除対策について,膨大なデータをわかりやすく発表してもらいました。また,新潟県農業共済連合会の石塚功氏から連合会で取り組んでいる病害虫発生予察強化事業の水稻における取り組み,新潟県中越農業共済組合の小野田英樹氏から同事業の果樹における取り組みについて発表いただき,現場における予察調査結果にもとづく防除の実践事例が披露されました。3題いずれも本会の大会では今まで紹介されていない,興味深い内容で,多数の反響がありました。

地元の会員が少なく,スタッフ不足から,特別な参加者の皆様へのお土産の用意やオプションイベントもできず申し訳なく感じていますが,1日目の夕方の情報交換会では,地元の銘酒8種類を楽しんでいただきました。

事務局の事情で準備が遅れ気味で,案内送信,発送,ホームページ掲載,が開催の40日前ころになってしまい,応用動物昆虫学会のホームページ等にお知らせを出せず,会員外の一般の方への周知ができなかったことなど反省点もありますが,大会本部役員の皆様のご助言,ご支援と,参加された皆様のご協力により予定していた内容をなんとか,滞りなく進めることができ,有意義な2日間にすることができました。

最後になりますが,シンポジウムの座長をお引き受けいただき,遠路来県いただいた樋口博也様,シンポジウムの講演をお引き受けいただいた4名の皆様並びに「地元枠」一般講演発表の3名及び新潟県植物防疫協会,新潟県農業共済組合連合会をはじめスタッフとして協力いただいた多くの皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

新潟大会事務局 中野潔
(新潟県園芸研究センター)



第39回常任幹事会議事録（概要）

日時：2012年6月14日 11:30～12:30

場所：ホテルニューオータニ（新潟県長岡市）

参加者：上遠野，柴尾，春山，岸本，田中，西松，井村(兼奈良大会事務局)，江村，大井田，
行徳，後藤，豊嶋，中野(昭)，中野(勇)，西森，根本，林，平井，丸山，宮井，山本，
和田，中野(新潟大会事務局)（敬称略）

欠席者：西東，増田，村井，木下，本多（敬称略）

1．開会挨拶

（挨拶）上遠野会長 （会議進行）柴尾副会長

2．報告

（1）第38回常任幹事会議事録の承認

(2) 事務報告

会員動向

平成23年3月31日現在 : 502名

平成23年度 新規入会24名, 退会81名

平成24年3月31日現在 : 445名

今回名簿整理にあたり, 会則にのっとり2年間会費滞納者は自動的に退会者としたため多くの退会人数となった。

名誉会員: 正野俊夫, 廿日出正美, 坂井道彦, 池田二三高

研究会役員, 都道府県幹事(2012.1.1~2013.12.31)

県幹事4名交代(埼玉, 滋賀, 鳥取, 福岡)

平成23年度事業報告

・事業報告

常任幹事会(第37, 38回), 山口大会, 総会, ニュースレター(No.27, 28)

・予算執行状況報告(2011.4.1~2012.3.31)

収入1,850,721円 支出449,002円 残高1,850,721円

次年度繰越金1,401,719円 (前年度繰越金1,351,465円)

・会計監査報告

(3) 役員会報告

(4) ニュースレター, およびホームページ関連

・ニュースレター関連

No.28 3月26日発行済。発刊経費実績: 147,380円(487部)

No.29 編集経過報告。7月中旬発送予定。

・ホームページ関連

3. 議題

(1) 平成24年度事業および予算案

平成24年度事業計画

平成24年6月 第39回常任幹事会, 第17回大会, 総会(新潟県長岡市)

7月 ニュースレターNo.29発行

12月 第40回常任幹事会(東京都)

平成25年1月 ニュースレターNo.30発行

平成24年予算案

収入合計 1,848,719円(内繰越金1,401,719円)

支出合計 1,848,719円(内予備予算978,719円)

(2) 第17回大会(平成24年新潟大会)運営概要

・参加申込150名(当日参加あり160名程度)

・講演シンポジウム「カメムシ対策のこれから ~カメムシ類の加害種変化とつきあい方」は講演4題。一般講演25題で, うち3題を新潟県地元枠として非会員講演3題。

・情報交換会参加申込120名。メーカー出展3組。

(3) 第18回農林害虫防除研究会奈良大会(平成25年度)大会について

・大会事務局(事務局長: 井村岳男氏)より説明

- ・日時：平成25年6月下旬～7月上旬（1日目13:00～2日目12:00頃）
- ・会場：大会，情報交換会ともに奈良ロイヤルホテルを予定
- ・シンポジウムのテーマ・内容は未定（IPM関連を検討）

（４）その他

- ・次回常任幹事会（予定）：平成24年12月11日，東京：日本植物防疫協会会議室

農林害虫防除研究会会則

（名称）

第1条 本会は，農林害虫防除研究会と称する。本会の英語訳を Agricultural Insect Pest Management Society of Japan（略称 AIPM Society of Japan）とする。

（目的及び事業）

第2条 本会は，農林害虫防除に関する国内外の研究と技術に関する情報の交換を行い，会員相互の知識の高揚と親睦を通じて，農林業の発展に寄与することを目的とする。

第3条 本会は，目的達成のため次の事業を行う。

- （ア）集会の開催（イ）ニュースレターの発行（ウ）調査研究（エ）情報交換
- （オ）その他必要と認められるもの

第4条 本会の所在地は事務長の所属機関とする。

（会員）

第5条 本会の会員は正会員，賛助会員，名誉会員とする。

第6条 正会員は農林害虫防除の専門家及び本会の趣旨に賛同して年会費を納入した個人とする。賛助会員は本会の活動を賛助するため入会した団体，機関，個人とする。名誉会員は本邦農林害虫防除の発展に多大な功績があり，常任幹事会によって推挙された個人とする。

第7条 正会員ならびに賛助会員は別に定める年会費を納入するものとする。会費を2年間滞納したときは退会したものとみなす。

（役員等）

第8条 本会は次の役員をおく。

- 1.会長 1名
- 2.副会長 2名
- 3.常任幹事 25名前後
- 4.事務長 1名
- 5.都道府県幹事 47名
- 6.会計監査 2名
- 7.ニュースレター編集担当 1名
- 8.情報担当 1名

第9条 役員の任期は2年とする。ただし，会長は重任することは出来ない。

第10条 会長は本会を代表し，会務を統括，本会の円滑な運営を行う。副会長は会長を補佐し，会長に事故あるときはその責務を代行する。事務長は本会の庶務，会計を司る。常任幹事は会長，副会長，事務長とともに，常任幹事会を構成し，常時会務の執行に関し審議する。都道府県幹事は当該都道府県の会員の把握とともに，本会会務の連絡に当る。また，会務全般について具申する。会計監査は本会に関わる経理について監査を行い，総会に報告する。ニュースレター編集担当はニュースレターの編集及び発行を司る。情報担当は本会のホームページ，メーリングリストの管理を行う。

第11条 本会役員を選出方法は以下の通りとする。

(ア) 会長，副会長は常任幹事会で選考し，総会で承認を得る。

(イ) 事務長は会長が指名し，総会で報告する。事務長は補佐を数名任命することができる。

(ウ) 常任幹事，会計監査，ニュースレター編集担当及び情報担当は会長が指名し，総会で報告する。

(エ) 都道府県幹事は会長が指名し，委任する。

第12条 本会は必要に応じ専門委員をおくことができる。

(集会)

第13条 集会は総会，大会，セミナーなどとする。総会は原則として年1回，通常，大会期間中に開催する。大会は毎年6～7月に行う。

(会計)

第14条 本会の経費は会費，寄付金その他によってまかなわれる。大会の会計は別会計とする。

第15条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり，翌年の3月31日に終わる。

(付則)

第16条 本会則の変更は総会の議決による。

第17条 1. この会則は平成8年6月22日から施行し，一部改正を平成13年6月28日に行った。

2. この会則の一部改正は平成14年6月28日から実施する。

3. この会則の一部改正に伴い，会計年度を以下の通りとする。

4. この会則の一部改正は平成20年6月26日から実施する。

平成14年度は平成14年1月1日から平成15年3月31日，平成15年度は平成15年4月1日から平成16年3月31日，平成16年度以降は同様4月1日から翌年3月31日。

農林害虫防除研究会名誉会員名簿

正野俊夫，坂井道彦，廿日出正美，池田二三高

農林害虫防除研究会役員名簿 (2012～2013年)

会 長：上遠野富士夫

副 会 長：柴尾 学，春山裕史

常任幹事：諫山真二，井村岳男，江村 薫，大井田 寛，行徳 裕，後藤哲雄，西東 力，豊嶋悟郎，中野昭雄，中野勇樹，西松哲義，西森俊英，根本 久，林 直人，本多健一郎，増田俊雄，丸山宗之，宮井俊一，村井 保，望月 淳，山本敦司，和田哲夫

事 務 長：岸本英成

会計監査：西東 力，木下正次

ニュースレター編集担当：田中雅也，西松哲義

情報担当：本多健一郎

農林害虫防除研究会都道府県幹事名簿

都道府県	氏名	都道府県	氏名	都道府県	氏名
北海道	岩崎暁生	新潟	中野 潔	岡山	佐野敏広
青森	木村勇司	富山	西島裕恵	広島	栗久宏昭
岩手	藤沢 巧	石川	藪 哲男	山口	本田善之
宮城	増田俊雄	福井	高岡誠一	徳島	中野昭雄
秋田	菊池英樹	岐阜	市橋秀幸	香川	松本英治
山形	上野 清	静岡	小杉由紀夫	愛媛	大政義久
福島	荒川昭弘	愛知	三宅律幸	高知	広瀬拓也
茨城	横須賀知之	三重	西野 実	福岡	嶽本弘之
栃木	小山田浩一	滋賀	江波義成	佐賀	衛藤友紀
群馬	小倉愉利子	京都	徳丸 晋	長崎	寺本 健
埼玉	植竹恒夫	大阪	田中 寛	熊本	行徳 裕
千葉	河名利幸	兵庫	山下賢一	大分	小野元治
東京	小谷野伸二	奈良	井村岳男	宮崎	黒木修一
神奈川	大矢武志	和歌山	井口雅裕	鹿児島	井上栄明
山梨	村上芳照	鳥取	大澤貴紀	沖縄	谷口昌弘
長野	栗原 潤	島根	奈良井祐隆		

研究会への入会方法

入会希望者は下記事務局までご連絡ください。入会年度のNews Letterと振替用紙（郵便振替：農林害虫防除研究会 00810-0-82999）をお送りします。年会費は1,000円です。入会フォームが農林害虫防除研究会HP（<http://agroipm.ac.affrc.go.jp/narc.html>）からダウンロードできます。

事務局：岸本 英成

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構

果樹研究所カンキツ研究口之津拠点

〒859-2501 長崎県南島原市口之津町乙 954

TEL 0957-86-4499 FAX 0957-86-4268 E-mail: kisimoto@affrc.go.jp

会費納入のお願い

2012年度会費の納入をお願いします。振り込み用紙を同封しておりますのでご活用下さい。会費は複数年分を同時に納入することが可能です。

2013年度までの会費納入状況については、西暦の下2桁と納入の有無を（ ）内に示してあります。（ ）内の は納入済年度を、×は未納年度を、- は未加入年度を表しています。年会費は1,000円です。会費納入について不明な点があれば、上記事務局までお問い合わせ下さい。

住所不明でニュースレターが返送されて来る場合があります。人事異動等による所属、住所、送り先が変更となった場合は、事務局までお知らせください。今号の宛名ラベルが、会員名簿に登録されています。

ニュースレター 31の原稿募集

ニュースレターは皆様の投稿で成り立っています。昆虫や防除に関連する文章の投稿をお待ちしています。文字数は400～1600字程度で書式の規定はありません。カラーの写真や図表も掲載できます。投稿方法は、(1)電子メール、(2)フロッピーディスク郵送、(3)手書原稿ファックス・郵送、のいずれでも結構です。

使用するワープロソフトは、Windows版の一太郎、Word、Ms-Dosテキストを歓迎します。また、「各種研究会等の開催案内」も受け付けますので、ご利用下さい。

編集担当：田中 雅也

兵庫県立農林水産技術総合センター 環境・病害虫部

〒679-0198 兵庫県加西市別府町南ノ岡甲1533

TEL 0790-47-1222 FAX 0790-47-0549

E-mail : masaya_tanaka@pref.hyogo.lg.jp

編集後記

今年の冬は寒さが厳しいですね。しかし、元気あふれる会員の皆様におかれましては、ますますご活躍のことと思います。こんにちは、編集担当の田中雅也です。ようやく前号を発行できたと思ったら、もう今号の編集に追われる日々となりました。今号でも、都道府県幹事の皆様をはじめ多くの方のご協力により、スムーズに編集作業ができました。本当に感謝、感謝です。

さて、今号のニュースで「おやっ」と反応してしまったものがありました。花粉症についてです。実は、私も昨年度からイネ科花粉症が発症してしまい、調査時期には辛い思いをしております。会員の皆様の多くの方も、職業に関連する花粉症などのアレルギーで大変な思いをされていることと思います。個人的にはこれは「労災」と思っていますが、どうなのでしょう？

今号発行で、折り返しとなります。残り2号も充実した内容でお届けできるよう頑張りますので、引き続きよろしく願いいたします。(あっ、笑いを入れるの忘れた...)

(編集担当 田中雅也)

***** ニュースレターNo.30 (2013年1月発行) 目次 *****

< 巻頭言 >			
基礎研究と応用研究の連携	柴尾 学	...	1
< ニュース >			
レッドデータブック改訂に際して思うこと	窪田聖一	...	3
4%の根拠	小池 隼	...	3
ツルマメの昆虫相調査雑感	菊地淳志	...	4
いちごの天敵を普及して感じたこと	中村吉秀	...	5
チャ(茶)の侵入害虫のチャトゲコナジラミが ツバキやサザンカ等を中継基地として拡がった可能性	徐 錫元	...	6
最近和歌山県のカンキツ産地で問題になっている オナジマイマイ	貴志 学	...	9
微小害虫飼育の味方	萩原駿介	...	10
予察業務と花粉症	春山直人	...	10
転勤後の楽しみ	鈴木 誠	...	11
北日本で多発するオオタバコガ	木村勇司	...	13
カメムシ類の脅威	新谷誠敏	...	14
< 第18回農林害虫防除研究会(奈良大会)のご案内 >		...	16
< 第17回農林害虫防除研究会(新潟大会)報告 >		...	16
< 第39回常任幹事会議事録(概要) >		...	18
< 農林害虫防除研究会会則 >		...	20
< 農林害虫防除研究会名誉会員名簿 >		...	21
< 農林害虫防除研究会役員名簿 >		...	21
< 農林害虫防除研究会都道府県幹事名簿 >		...	22
< 研究会への入会方法 >		...	22
< 会費納入のお願い >		...	22
< ニュースレター 31 の原稿募集 >		...	23
< 編集後記 >		...	23
< 目次 >		...	24

< 著作権 > このニュースレターに掲載された記事の著作権は当研究会に帰属します